

HSC*の理解と支援

*Highly Sensitive Child(とても感受性の高い子ども)

HSCの正体は、わがままではなく「神経系の特性」
— 約15%～20%（5人に1人程度）に備わっている生まれもった気質 —

- **原因** 生まれもった脳の扁桃体（不安・恐怖を司る）の感受性の高さ。【心理学の分野】
- **DOES（ダズ）特性**
 - **D**：深く考える。（慎重、返答に時間がかかる。）
 - **O**：過剰に刺激を受ける。（**雑踏、大きな音、不規則な動き**で脳がパンクする。）
 - **E**：高い共感性（誰かが叱られていると、**自分が叱られている**ように傷つく。）
 - **S**：微細な刺激を察知（空気感、匂い、光、**先生の不機嫌**に敏感）
- **状態** 「通学路で固まる」「欠席が増える」のは、怠慢ではなく、**脳のオーバーヒート**による**フリーズ（生存本能）**。

先行研究を参考にHSC調査を実施し、統計的に4つの因子に整理

第1因子	感覚の過敏性と圧倒されやすさ
第2因子	他者の感情への反応と視線への敏感さ
第3因子	思慮深さと慎重さ
第4因子	微細な変化への気づきと美的感受性



HSCの程度を数値として把握

A:上位群	15%	大きな音や雑踏が苦手 で、集団生活に不適応 を起こす可能性のある 生徒は、 176名 （各 クラス6,7名）程度と 推定される。 ※R8.3本校調査
B:中上位群	37%	
C:中下位群	30%	
D:下位群	18%	

教員：基本的な教育技術による「安心感の最大化」

【指導】全体への強い叱責を避ける。

「**連帯責任**」や「**大声での指導**」、「**長時間の説諭**」はHSCのエネルギーを激しく消耗させる。個別指導を基本とする。

【環境】視覚・聴覚刺激のカット

室内における**ダッシュ、寝そべり、奇声、大声の会話**等については、見逃さずその都度声掛けをする。

掲示物を減らす、騒がしい生徒と席を離す、スピーカーの近くを避ける。

【対人】予告と見通し

予定変更を事前に伝える。「**次は～をするよ**」という小さな声掛けが安心感を生む。

学校全体：共通理解による共通支援

：プロの教員としての判断は必要。
：何でもOKという訳ではない。

【避難】「公式な避難場所」の設定

限界を感じた時、自ら別室へ行くことを「正当な権利」として認める。

（臨時：担当が個別に判断）**保健室・ピット**（常時：正式な手続き後）**ピット・スマスタ**

【容認】合理的配慮のスタンダード化

イヤーマフ、ノイズキャンセリングイヤホンの使用、体育の列から少し離れる等の個別配慮を「特別扱い」とせず**個別に判断し容認**する。

【評価】「部分参加」を肯定する。

行事の練習、集会などは「数分だけ参加」「見学のみ」でもOKとし、0か100かの評価をしない。

【意識】「甘え」という言葉の禁止

全教職員で「**身体的・神経学的な違い**」であることを共有し、根性論での対応を排除する。